第23回小野十三郎賞受賞者インタビュー

九里順子（詩評論書部門特別奨励賞）×細見和之（詩評論書部門最終選考委員）

細見　まずは、小野賞の特別奨励賞、詩評論書部門を受賞されまして、おめでとうございます。

九里　ありがとうございます。

細見　贈呈式であれば、受賞者の言葉を頂くのですが、改めて受賞されてどんなことを思われていますか。

九里　「粘り強く研究」と評価していただいたので、それがとても私としては嬉しかったですね。私の良いところを見てくださったな、というのが率直な印象です。

細見　木下夕爾という、正直私もほとんど知らなかった詩人です。広島の、呉でしたか。

九里　福山ですね。

細見　福山でずっと活躍して。俳句も主宰者、詩の同人誌の主宰者を務め、地道に活動していた。東京に出るチャンスがあったんだけれども、それが叶わなかったというのをどこかでずっと抱えていた人でもあったと。

九里　そうですね。

細見　そういう詩人・俳人に、本当に粘り強い形で光を当てられたお仕事だと思いました。

九里　ありがとうございます。

同世代として

細見　九里さんと私、同世代ですね。私も一九六二年生まれです。ただ私は早生まれなんですよ。

九里　私も早生まれですよ。

細見　あ、そうですか。僕は二月生まれ。

九里　私は三月です。

細見　じゃあ学年も一緒ですね。そうするとだいたいいろんな出来事とか、テレビで流れていたものとか、同じような状況で接していたんだと思うんですね。私は大学に入ったのが一九八〇年です。

九里　私もそうです。

細見　九里さんの場合、大学は？

九里　福井大学です、最初は。

細見　お生まれはどちらでしたか。

九里　福井県の大野市です。

細見　文学関係では福井は繋がりがありますね。詩でいえば、中野重治が福井出身。鮎川信夫も親の出身が福井で、ずっと拘りを持っていたようなところがあった。荒川洋治さんも福井ですよね。

九里　そうですね。

細見　それで、大学院が北海道大学。

九里　そうです。

細見　福井には生まれてから大学卒業までいらした？

九里　生まれた大野市は田舎なので、通学はできないこともありませんがかなり厳しいので、大学時代は福井市で暮らしていました。

細見　文学学校でずっと詩の講師をしてきた川上明日夫さんも福井市に住んでいます。私たちの世代で文学って、まだある程度興味関心があったかもしれないけれども、少しずつ変わっていくところがあるじゃないですか。文学、文学っていうのが自明ではない時代になっていく。表現でも、ある種文学的な漫画も七〇年代から広がっていった。私はあまり読んでないんですけど、同世代はどちらかというと漫画の表現のほうに行って、そんなに文学、文学っていう感じじゃなかったかなと思う。九里さんの場合はどうですか、文学は子供の頃から親しいものでしたか？

子どものときの文学体験

九里　文学という自覚はなしに、読んでいたような気はします。小さいときに、少年少女名作集みたいなもので馴染んでいたし、文学

という枠で意識してはいなかったと思います。

細見　少年少女文学全集、わりと海外のが多いですよね。

九里　そうですね、でも日本のもありました。

細見　私は『小公子』の主人公「セドリック」というのが不思議でね。親父が乗っていた車がセドリックなんです。

九里　なるほど（笑）。

細見　日産が小公子からセドリックという名前を付けたんだと思うんですけど、自分にとっては車の名前が先だった。文学好きという意識はなくて、少なくとも高校ぐらいまではそういう意識はなかったですね。

九里　私もそんなに力入れてという感じではなかったですね。さっきのセドリックじゃないですけど、『小公女』に屋根裏部屋なんか出てきますね。実家にも屋根裏部屋もどきがあって、薪というか焚付に使う木を置いていたんですけど、ネズミがいるような空間で。

細見　丸太みたいなものですか？

九里　もっと細いんです。実家は麹屋をやっていたので。小さくて慎ましい麹屋なんですけど、それで、火をくべるときの、細い木切れ、粗朶というのか。

細見　私の田舎でも麹屋さんはありましたけど、それを売っている、商売としてやっていました。九里さんのところでは作っていた？

九里　作って売っていました、麹と味噌を。

細見　たしかにヨーロッパの家の屋根裏部屋と日本の家屋の屋根裏部屋はだいぶ違うはずですけど、そう思わないで読めますよね。

九里　やっぱり自分の環境に引き付けて読みますね。

細見　出てくる人間もみんな人種が違うはずなんだけど、違和感なしに読んでいる感じ。後になるとちょっと不思議だったりする。

九里　子どもには拘りがないんですよね。

細見　すべて入ってきちゃう。

九里　不思議と映像が頭のなかで出来てしまうわけです。

昭和の商店街の記憶

細見　うちは家具屋でした。祖父は家具を作る職人的な側面をもっていたけど、父の代になるともう小売ですね。コクヨとかカリモクとかの家具を売るだけ。それで仕入値と売値の違いが子ども心にはわからない。どうして利潤をあげていいのかがわからなくて、今も実はよくわかっていない。

九里　まあいろんな労働が加算されるからでしょう。

細見　職人ならわかるんです。材料が八千円だとしても、それで何か新しいものを作るから、定価を一万二千とか付けてもね、労力とか技術が入っていますから。小売というのは左からきたものを右に回しているだけ、店に置いているだけ。だから今みたいにネットショップが流行ったら、当然もう小売は駄目ですね。まだ小売でやれていた時代だったけれど、私も兄も継がなかったから父の代で終わっちゃった。麹屋さんはどうなったんですか。

九里　同じですね。姉が一人いるんですが、姉も私も継がなかったので、廃業ですね。

細見　たぶん継がせたいという強い気持ちは両親になかったんでしょうね。

九里　なかったですねえ。大変ですもん、肉体労働が。

細見　朝早かったですか。

九里　朝早くて、夜は遅い。傍で見ていても大変だと思いました。親も継がせたくないよな、という感じ。

細見　お豆腐屋さんとかもね、本当にすごい技術だと思うし、朝早くからやっていて、安いし。私が子どもの頃まだかろうじて、母が鍋を持って買いに行くみたいなのがありました。味噌や麹もみんなが買っていた。

九里　そういう時代ですね。地域差もあると思いますけど。

細見　福井の雪深いところだと、麹のような発酵食品は大切な感じ。ぽつんとあったのですか？　それとも商店街のなかですか。

九里　商店街です。越前大野城を見上げる目抜き通りで、通りは今もありますが、他のお家も跡を継がないことが多くて、はっきり言ってなかなかすごいことになっています。

細見　それはうちも同じです。篠山城の城下町で、お城が出来たときに作られた町です。私が子どものとき、父が家具屋をやっていたところは立町通りといって、八百屋とか魚屋、肉屋がずーっとあった。母が買い物かごを提げて夕方に買い物して、夕食の材料を揃えていた。私が小学生ぐらいまでかなあ。近くに大きなスーパーが出来て、みんな便利だからそっちに行くようになった。

九里　タイムラグはあるかと思いますけど、私の場合は今から二十年前ぐらいまでは、一応商店街の体裁を保っていましたね。

細見　やっぱりそれは目抜き通りだからですね。うちの田舎でも本当の商売の中心のところは、今も一応商店街です。果物屋とか八百屋とか、食料品店がかろうじてあります。だけど今やっているところも、次の代が継ぐかといったらあやしい感じがする。私たちが育ったのはやはり似たような環境ですね。

九里　昭和の商店街。

細見　考えたら、私たちが生きた昭和の時代は決して長くない。八九年で終わったとしたら、六二年からだから、二十七年ですね。その後のほうがすでに長い。

九里　実はそうなんですね。

細見　だけどいわゆる多感な時期、世の中をわかっていく時期が、昭和の賑やかな時代だった。ボンカレーとか。

九里　懐かしいですね。

細見　アースなんとかのマットとか。

九里　蚊取り線香とか、オロナイン、オロナミンとか。いわゆるホーロー看板がありましたね。

文学研究のはじまり

細見　ちょっと懐かしさみたいなのが、どうしてもありますね。それで福井大学に行かれたときは、最初から文学の研究をするつもりだったのですか。

九里　それが違うんですよ。福井には国立大学が一つしかなくて、当時の福井大学は教育学部と工学部なんですね。うちはしがない麹屋だったので、とりあえず食いっぱぐれないようという不純な動機で、教員になろうか、と考えていました。

細見　へえ、そうですか。僕の同級生で福井大学の教育学部に行ったのがいますよ。卒業研究にうちの田舎のことをやったりしていた。専門は歴史ですね。

九里　歴史だとちょっとわかんないなあ。

細見　教育学部のなかでも分かれているんですね。

九里　そうです。福井大学では、教育学部といっても、教員になろうと皆必死になっているわけでもないと感じました。人文学系の教養を担当しているという印象もありました。

細見　そうすると、教育学部だけれども文学的なことをされていたんですか。

九里　そんな感じですね。もちろん、教育学部なのでひと通りやりましたよ。音楽教材研究とかも。よくわからないまま終わってしまいましたけど。ピアノもやりました。

細見　ピアノはそれ以前からやられていたんですか。

九里　いえいえ。だから悲惨でしたよ。

細見　僕も三十ぐらいからちょっとやりましたけど、全然身に付かなかった。

九里　楽しみでするのと違って、否応なしにやらねばならないのは辛いですよ。

細見　バイエルとかやられました？

九里　やりました。

細見　私もバイエルがなかなか終わらなくて。

九里　私も担当の音楽教員に、君の小指を見ればいかに君の性格がいい加減かわかる、なんてわけのわからないことを言われて（笑）。

細見　私の同級生は、結局教員試験に受からなくて、塾の先生になった。今も年末年始はすごく忙しそうにしています。そうすると、本格的に文学の研究をしようと思われたのは、大学院から？

九里　大学の二、三年の頃に、やっぱり私は教員には向いていないなと思って、回り道をしているような感じですが、大学三年ぐらいの頃に、「文学の道に進もう！」と思ってしまったのですよ。

細見　そのときには、こういう文学というイメージはあったのですか？

九里　卒論は北村透谷でした。あの人は面白いですよ。

細見　面白いですね。

九里　矛盾したものを自分のなかに抱えている。『蓬莱曲』を読んだらすごく面白くてですね、整理しきれない要素が作品のなかにあって、根が深いと思ったんです。

細見　評論がまた凄まじいですね。原稿用紙三、四枚であれだけのことを書いてしまう。

九里　そうですね。あの人って、詩人でもあり評論家でもあり、論理性とイメージの喚起力、それがすごいと思いましたね。

細見　「人生に相渉るとは何の謂ぞ」とか、格好いいですね。

九里　「空の空の空を撃ちて、星にまで達せんとせしにあるのみ」なんてちょっと出てこないですね。

細見　そのわりに僕は、「楚囚之詩」はもう一つピンとこない。

九里　あれは透谷の願望が出ちゃったというか。自由民権運動から離脱して、大矢正夫だけに手を汚させたという負い目がありまして、大矢も自分も救いたいという願望が出過ぎましたね。

細見　『蓬莱曲』のほうがよかったんですね。

九里　より面白かったという感じですね。

細見　「双蝶のわかれ」でしたか。

九里　あれは悲しい詩ですよ。

細見　ミミズの詩もあったかなあ。

九里　ありましたね。地べたを這うものが好きですよね、結構。

細見　それで、卒論が透谷で、大学院でも透谷をやるっていう気持ちだったんですか？

九里　はい。

細見　そういう意味では少し方向が変わられました？

九里　そうですね、研究の作法というのが、良いのか悪いのかわからないですけど、北海道大の大学院の授業は、近代文学論争ばかりやっていた。それで近代文学がどんなテーマを巡って展開してきたかはわかったんですけど、実際に読むとき、また論文を書いていくときに、テーマ設定を絞らないと論理の整合性が出てこないということが身に沁みました。そういう訓練を大学院時代にやったというのが実感です。

細見　なるほど。そういう研究というのは、文学が好きでやるというのとは少しずれちゃうところがありますね。

九里　ありますけど、修行のつもりでやっていました。

文学研究の展開

細見　私たちのころは今ほど査読、査読とうるさくなかったと思いますが、今の学生は査読、査読と言われ続けてかわいそうですね。フィギュアスケートでショートプログラムとフリープログラムがあるでしょう。学生にはとりあえずショートプログラムの数をこなさないとしょうがないから、やりましょうと言っています。それをクリアしたら、後は好きなことをフリーでやれるからと。でもやっぱ

りちょっと辛いですね。本当にやりたい研究と、査読を通るための研究があってしまう。それに、国文の世界には学閥、派閥なんかが結構あるんじゃないですか。

九里　私は幸か不幸か、ほとんど派閥に関係なしに生きてきました。

細見　私もそうで、指導教員がそういうことは何も言わない人だったので、まったく自由でした。他の分野、国文、国史、とくに古典なんがやっていると、どの写本に基づいて研究するか自体が派閥によって決まっているような感じがあって、厳しいなと思いました。

九里　ちょいと怖いですね。脳味噌が固まりそうで。

細見　九里さんの研究テーマ自体はどうでしたか？　指導教員はいたわけですよね。

九里　いましたけど、研究者から出発したというより評論家から出発した方なんですね。大学院を出ていないので、いわゆるアカデミズムの派閥のなかでは、過剰な疎外感を持っていたようでした。もう亡くなられましたが、かなり偏屈な方でした。困難な環境は人を歪ませるんですよ、きっと。

細見　今はもうゼミの後に宴会なんてしなくなりましたけど──コロナ禍以前にね。でも私たちが学生の頃はまだゼミのあと宴会で盛り上がる感じもあったと思います。北大なんか特にそういうイメージがありますが。

九里　クリスマスと卒論提出が同じ時期で、そのときとか、前期が終わるときとか、限定されていましたね。

細見　院生はたくさんいましたか？

九里　そんなにいなかったですよ、昔は。

細見　私も自分だけだったときもあったし、ゼミに行ったら一対一だったりしましたね。

九里　マンツーマン、結構辛くないですか。

細見　尊敬している人だったから、それなりに下調べして行って貴重な時間でした。

九里　院生、何人いたかなあ。十人いたかいないかぐらいかな、と思います。

細見　透谷を卒論でされて、透谷の研究をしようと思って行ったら、近代文学論争みたいなのがテーマになっていたということで、論文はどうされたんですか？

九里　自分で書いて、それを指導教員に見せる、みたいな感じですね。

細見　最初の著書が『明治詩史論──透谷・羽衣・敏を視座として──』（和泉書院）とありますが、「敏」というのは？

九里　上田敏です。

細見　透谷研究がそのあたりに繋がっていったわけですか。

九里　透谷の部分は、修論そのものではないんですけど、それが出発点ですね。明治の詩人たちが抱えていた問題とか、表現意識が面白いなと思ったので、その流れで敏までやりました。

細見　それが博士論文ですか。

九里　そうです。

細見　そのときに、いわゆる詩歌、詩を研究の軸にするのは、珍しくはなかったんですか？

九里　珍しくはなかったですね。

細見　近代文学でも研究の主流は小説かな、という感じがどうしてもするんですけれど。

九里　今研究者の関心の中心は詩とか小説よりも、文化論的なところにかなり前から移っていますね。小説を読み込むというより、それがその時代・文化のなかでどういう意味を持つのか、そっちのほうの関心が強い。

細見　私は以前に大阪府立大学にいたんですけど、近代文学の先生のところでは、太宰治はやっぱり人気がありました。それから夏目漱石で卒論を書く学生もいました。

九里　かなりオーソドックスな作家ですね。

細見　詩というのはテーマになりにくいのかな、という感じがしました。

九里　うちの大学では卒論に詩を選ぶ学生もいますけど、やっぱり学生にとっても馴染み

はないですよ。

研究と断絶した俳句のよさ

細見　教科書なんかで何らかの詩には接するんだけど、いわゆる詩集なんて学生はなかなか手にしないですね。一方で九里さんは俳句をずっとされている、これはいつからですか？

九里　研究者として就職してからです。やっぱり研究論文は疲れます。論理の整合性とか緻密さとか、資料をどれだけ禁欲的に読めるか、とかが問われる。それで飛躍したかったんです。切断的飛躍なんて言うとちょっと格好いいことになりますけど、それが自分のなかに欲しかった。

細見　どうして俳句だったんですか。

九里　一番短いでしょう？　短いのっていいですよ。論文のように論理を繰り延べるというのが性に合わない。その性に合わない仕事を三十年やってきましたけど、私はだいたい文学少女でもなんでもなくて、家に画集があったので、絵を見てボーッとしているのが好きな子どもでした。その場面を切り取るというのか、そこから自分の妄想が膨らんでいく。俳句というのは切り取る文学だと思うんです。そういう意味では絵画、あるいは写真に近いのかなって。

細見　石原吉郎も俳句をやっていて、同じようなことを言っていますね。映画でいえばポスターになるような場面、それは一枚の写真ですね。その前の物語と後の物語があるんだけど、スパッと切ってその断面が提示されている。逆に言うと、そこから前の場面や後の場面をいろいろ想像することが可能である。石原はそういうイメージで俳句を語っています。九里さんは透谷とか、それこそ敏まで、明治詩論をされていて、詩を書こうというふうには思わなかったんですか。

九里　やっぱり研究していると、それを離れた時間までやりたくないというのがありますね。自分に負荷を課しているので。

細見　そういう意味では俳句は、自分の研究とははっきり切れていることができる。

九里　そう思っていました。

細見　小野賞の詩集のほうの選考委員で坪内稔典さんという人がいらっしゃいます。九里さんのことをお聞きしたらご存知でしたね。やっぱり俳句の世界としては繋がっているところがあるんでしょうか。俳句のひとは結社に入るでしょう？

九里　私は坪内さんを直接存じ上げているわけではないんですけれど、同人誌をお送りしているので、それで知っていらしたのではないでしょうか。

細見　九里さんも同人誌で俳句を発表されているのですか？

九里　今入っているのがちょっと面白い同人誌で、俳句だけじゃなく、エッセイとか評論も載せているんですよ。私もエッセイを書いています。

細見　エッセイはその同人誌で扱っているので書かれ始めたところもあるのですか。どうしてその雑誌に入られたのですか？

九里　私が前に出した句集の書評を載せてくれたんです。それが的確だな、鋭いなと思って、入ってみたいと思いました。

細見　それまではどうされたんです？

九里　別の同人誌に入っていました。

細見　句集を纏めようと思われたときは、ある程度作品が出来た、あるいは何か区切りがあったのですか？

九里　単純に、ある程度纏まったので出してみよう、という感じですね。

細見　出されてどうでした？

九里　出してよかったと思いますね。これでまた次のところに進めると。

細見　研究とある意味で切れているのがいいんですね。私の場合はどこか研究と地続きになってしまう。

九里　それってしんどくないですか。

細見　私の場合はずるいところがあって、研究はドイツ思想で、哲学や思想が専門という言い方をしているから、詩について批評するのは仕事ではあるけど、専門ではないみたいな。それで両方やってきたんですね。

九里　逆に私は繋がっているかわからないんですけど、俳句をやりだしてから、論文もただベッタリと細かく書けばいいんじゃないということはわかりましたね。論文の文体でも、省略できるところはある、それを発見できたのはよかったと思います。

細見　俳句の書き方が、研究のほうにもフィードバックしてくる感じですか。

九里　それはあります。

細見　とはいえ、俳句というのは飛躍や断絶があるのがよくて、論文は一応論理的に繋がっていないと困るところがありますね。ジャンルは違うけど、私の知り合いで現代思想の批評をしているやつは、自分でも理解できないものを書きたいと言いますけどね。

九里　えっ。

細見　自分で理解できないんだから、読んだやつが理解できるわけがない。

九里　それはそうだと思いますけど。

細見　要するに自分が理解していることというのは、自分の理解の範囲内のことになる。表現というのはそれを越えることがあるでしょう？　自分が表現したいところ以上のもの、あるいは読み手がそういうのを読み取ってくれるとか。

九里　ありますね。

細見　そういう表現で起こることが思想関係でもあってほしいみたいな思いですね。

九里　どうなんでしょうか。

記憶の底にあった木下夕爾

細見　さて、今回の受賞作のことなんですけど、この研究書のなかでは九里さんはわりと禁欲的に、どういうふうに自分が木下夕爾と出会ったかなどは書かれてなかったと思います。そのあたりはどうなんでしょうか。

九里　さっき言いました、小さいときに読んだ少年少女名作集のなかに、詩歌の巻があって、そこに夕爾がいたんです。

細見　そうなんですか。それを覚えてらした。

九里　そうですね、「晩夏」という作品です。

細見　じゃあ最初に木下夕爾の作品に触れたのは、かなり若い頃になりますか。

九里　小学生のときですね。小学生にもわかる言葉で詩を書いていますよね。全部が全部じゃないですけど。「晩夏」に書かれた、田舎の駅の夏の空気が、わかる、わかるという感じで印象的だった。

細見　でも一旦はどこかに消えていたわけですよね、その記憶は。

九里　どこか記憶の底に潜り込んでいたと思うんですけどね。

細見　いつ頃蘇ってきたんですか。

九里　透谷をやって、室生犀星をやって、犀星をやりつつ、次誰をやろうかなというときに、北園克衛が面白いと思いました。北園克衛も例の少年少女名作集に入っていて、なんだこりゃ、と衝撃だったんです。そういうイメージが記憶の底に潜り込んでいて、そういう詩人をやりたいなと、自分の記憶というか、ここに到る時間と絡んでいる人をやりたいと、それが木下夕爾を正面からやってみようと思ったきっかけですね。

細見　たしかに犀星から少し繋がるようなところがありそうな感じがしますね、詩のありようとして。そうですか、少年少女名作集に入っていたんですか。それを編集した人が慧眼だったと言うべきでしょうか。

九里　夕爾は当時、児童詩のほうでむしろ知られていたんじゃないかと思うんですけどね。

細見　なるほど。それはよかったですね、子どもの頃に出会って、それは記憶の底に沈ん

で、ふっと浮上してきて、いったいあれはどういう人だったんだろうと思うことありますよね。そのときは児童詩とかの書き手としてそれなりに名が知られていたかもしれないけど、九里さんが研究しようとしたときには、もうだいぶ忘れられた人だったんじゃないかと思うんですけど。

九里　率直に言ってそうですね。いまでは郷土の詩人という扱いになっているんじゃないかと思います。資料を集めるのに結構苦労しました。一応定本の全詩集、全句集は出ていたんですけど、それは詩集、句集になったものを集めたものなんです。

細見　初出掲載のまま、詩集、句集に拾われていないものもかなりあったわけですね。それはどうしたんですか。

九里　初出に戻って調べました。

細見　私もそういうことを、これからいろんな人に関してしなければいけないことがあるんですけど、どうやって探したらいいか。

九里　どうやって探したのかな。

細見　いわゆる芋づる式だとは思うんです。

九里　たしかに芋づる式ですね。

細見　たとえば、詩集に拾われている作品で初出がこういう雑誌、媒体が多いとか、そうするとその雑誌に掲載されていながら拾われていない作品があるんじゃないかと。

九里　市川速男さんという研究者の方――もう亡くなられたと思うんですけど――が、かなり初出を詳しく調べた本を残してくださったので、それを手がかりにしました。

細見　一から全部自分でするのは大変だから。その人はいろいろ調べたけれど、調べただけで研究というところまで行かなかったのかもしれませんね。

九里　そうですね、土台を残してくださったのは非常にありがたかった。

細見　木下夕爾の故郷とか、活動していた場所へ行って、そういうのを確認されたのですか。その市川さんのことはどうやって知られたんでしょう？

九里　たまたま紙媒体の、研究の水先案内か何か、あるいは古本屋の目録で探し出したんだったと思います。

細見　まだ私たちの頃は、古本屋がたくさんあって、本当に古本屋巡りをしましたよね。今はネットで調べる形になって、逆にネットに上がっていないものはどうしようもない。醒めて見れば、それでもネットのほうが確実だろうということは言えると思うのですけど、古本屋でネットにもないこんなのがあった、という発見はありえますよね。それで、一つ一つ論文を、紀要とか含めて、そこに掲載していくっていうやり方をされた。

九里　そうです。

細見　年代を追ってやられたんですか。

九里　デビュー作からずっと、時系列に沿って、素朴にやってきましたね。

細見　子どもの頃に、「晩夏」という作品に出会われて、それから研究者としていろんな資料を見て辿って行かれて、木下夕爾のイメージは変わりましたか？

九里　変わってきましたね。子どもの頃は、優しい言葉づかいで小学生にもわかる世界を書いてくれている、ぐらいだったんですけど、研究者として調べてみると、夕爾が田舎に引きこもらなければならなかった葛藤、それでもなおかつ外の世界と繋がっていきたいという行動力、それを感じました。彼としては不本意なところがかなりあった人生だと思うんですけども、その人生を投げなかった、今はそんな印象を持っています。

細見　広島の問題、原爆の問題とどう向き合うか、そのあたりになるとある種の政治的な組織問題とぶつかるところもあって、九里さんのこの研究書を読んでいて面白いところでもあったんですね。夕爾が誠実であろうとすればするほど、そういう政治に翻弄される。

だけどもギリギリのところで自分を貫く、そういう姿勢が非常に印象深いですね。

九里　夕爾の原爆に関わる作品は、依頼されて書いたものなんですけども、やっぱり自分のスタイルを崩したくないというのはありますね。声高には叫ばない人なので。

細見　地方の詩人の集団をまとめるっていうのも、半端じゃない。みんな表現欲求があるし、エゴイズムも剥き出しになる。表現者はそういうものがないと面白くないところもある。同調するいい人ばかりでは面白みがありませんからね。よく言うと個性派、悪く言うと勝手集団をまとめていかないといけない。大変だったと思いますね。

九里　同人誌「木靴」なんかを読むと、好きに書いてもらっていたみたいですね。みんな作風がバラバラですし。

細見　まとめようとしない、それがよかったんですかね。

九里　だと思いますね。

細見　それがまたなかなかできないことなんでしょうね。それで、さっきエッセイの話もありましたけど、今度エッセイ集を出されるんですよね。

九里　はい、出します。

細見　さっき言われた同人誌に書かれたエッセイが中心になりますか。具体的にはどういうことを書かれていますか。

九里　本当に好きに書いた感じですけど、そのときの私の心に気になっているものです。このインタビューの最初に出た話題ですけど、「昭和」ですね。昭和で過ごした時間というのは何だったのかな、ということをやけに具体的なモチーフで書いています。

細見　私も最近、さっき言った商店街の話を書いているんです。やっぱり自分にとって、消えた町なんですね。具体的に白地図にお店を一つ一つ書き込んで思い出したりもしたいと思うんですけど。八百屋さんとか魚屋さんがあったところがただの駐車場になったりして、歯抜け状態どころじゃない。何もかもなくなってしまった。

九里　なるほどねえ。

細見　うちの店の場合もそうでしたけど、オイルショックというのは大きかったですね。一九七四年。あれ以降はもう全然駄目だったという話でした。同時に、私たちって八〇年代半ばからバブルと言われる時代じゃないですか。

九里　ありましたね、そんな時代が。

細見　ただ世間がバブルと言っている間、私は一番貧しかった。学生、大学院生で、月々どうやって生活していたのかわからない。

九里　私も奨学金とバイトで、全然バブルなんて実感なかったですよ。

細見　大学出てすぐ就職した同級生なんかに言わせると、バブルで自分の四、五歳上ぐらいの人たちがすごく羽振りのいい時期があって、ボーナスなんか出ると本当に全部奢ってくれたと言います。お店に行くと隣の席の全然知らない人にボトルをあげたり、女の子の集まっているテーブルがあったら、そこの勘定に入れといてと言ったり。

九里　えぇ――。

細見　二万や三万じゃなく、二十万や三十万、一晩で使っちゃう時期があったらしいです。でも二年ほどで、その人が行方不明になる。

九里　えっ。

細見　セレブだった夫婦が離婚しちゃうとか。バブルが崩壊して一挙に破綻していくのを目の当たりにしたのが私の同級生なんですね。一番バブルの恩恵を受けたのは、私たちより少し上の世代。ボーナスがいきなり三百万になるとかね。

九里　恩恵がなかった世代ですねえ。そんなん知らんて。

これからの研究をめぐって

細見　今後の研究の方向としては、どうなんでしょう。木下夕爾について大きな本を纏められて、今はどんなことをされていますか？

九里　今は夕爾の広島体験がちょっと私も引っかかっているのでそこをもうすこし調べています。じつは私、この三月末で大学の研究者を辞めるんです。

細見　そうなんですか、早期退職？

九里　選択定年制ってやつですね。率直に言ってちょっと息苦しくなってきたというのがあって。この後は本当にマイペースになると思うんです。エッセイにも書いているんですけど、結構私、ロマンポルノが好きなんですね。体制と映画、それに対する尖った作品もありますよね。茫漠たることですけども、学生が社会に物申し立てて、それがある程度社会全体に許容された。六〇年の安保はそういうことだと思いますし、それに対しては俳人も俳句をつくっている。表面的とか批判されているんですけど、大きくは「情況と詩」ということを考えてみたいと思っています。

細見　へえ、そこにはロマンポルノなんかの話も含めて考えたいということですね。

九里　直接入れるかどうかはわからないですけども。

細見　詩で言えば、映画もやっている福間健二さんがいる。彼は映画を自分で撮るんですね。彼から聞いたところでは、ロマンポルノでは四天王と呼ばれるような四人すごい監督がいた。彼らはお金がないから、自分の作りたい映画をそのままでは作れない。それでロマンポルノをいわば隠れ蓑として映画を作る。表面的にはロマンポルノとして上映されているんだけど、実際にはそこに自分なりのメッセージとか表現とかを込めていた。世間に出すときはいかにもロマンポルノっぽいタイトルが付いているんですが、全然違うタイトルで内輪で鑑賞したりしていたらしいです。それを研究している流れもあるようですよ。

九里　私は直接は扱わないと思うんですけどね、外枠というか、広がりを意識しながら。詩とか俳句でどう、詩人たちが何を受け止めたのか。

細見　やっぱり詩が元気な時代でしたしね、六〇年代から七〇年代って。小さなテント小屋で芝居の上映とかをやったりもしていた。私が大学に入学したときかろうじてそういうことをやっている人がいて、カルチャーショックでした。大学で勝手にやぐらを建てて、テントを張って、そこで公演をするんですね。ものすごく狭かったはずなんだけど、狭いと全然思わなかった。小さな小屋のなかの舞台がとても広く感じられた。今でもそのときの印象が残っています。七〇年代の運動の名残りでしたね。

九里　また小学生のときの話に戻るんですけど、銭湯のポスターがすごく印象に残っています。老若男女が来る銭湯にですね、「温泉こんにゃく芸者」のポスターが貼ってあるっていうのが（笑）、不思議でしたね。

細見　（笑）

九里　そういうのが私の原体験になっていますね。あれも滅茶苦茶というか、そういう映画なんですけども。日常の銭湯のなかにポッと非日常が入ってくるわけです。

細見　まあそういう点では昭和というのは、猥雑というのか滅茶苦茶ですね。でもそれが、さっき言われた六〇年安保の問題とも繋がっているところがあるんでしょうね。

九里　おそらく繋がっているんですよね。今おっしゃったように、いかにもいかにもなタイトルを付けながら……という感じ、あると思いますね。

細見　九里さんのこの『詩人・木下夕爾』という本を選考の場で議論したとき、一方で、やっぱりこれはアカデミックな仕事で、アカデミックな範囲に収まっているよね、という批評もあった。それでも、アカデミックなな

かでもこれだけやっていたらいいんじゃないの、という議論もしました。さらに、これをきっかけにアカデミズムを越えて、ということを期待してもいいんじゃないの、という話もしたんですね。

九里　ありがとうございます。

細見　そうしたら九里さん自身が早期退職されるという。ある意味では違うこともできる。ただ関心は続いていくわけですよね。木下夕爾、広島問題、そこに七〇年前後の話。僕は団塊世代の人のことは好きなんだけど、いざ議論するとよく喧嘩になっちゃうんですよ。

九里　でも私はまず六〇年のほうの安保なんですよ。学生がインテリでもあり過激派でもあった最後の時代だと思っています。もっと具体的にいえば樺美智子ですけど。ああいう人が出てきたということ。私は歴史とか社会思想的にやるわけではまったくないので、まったく私的なものにしかならないと思うんですけどもね。

細見　『人しれず微笑まん』とか、ああいうのはそれ自体が詩ですよね。

九里　そうです。

細見　そういうお仕事も期待を込めて注視させていただきたいと思います。

九里　ありがとうございます。気の長い話になると思いますけど。

細見　まあ八十ぐらいまでは生きていくみたいな時代ですからね。今から二十年どうするんだと思いますけど。

九里　楽しく過ごしたいなあ、なんて。でもさっきのアカデミックな範囲という、それはある意味非常に的を射ている言い方だと思うのは、夕爾を書いているときに、これで大学の仕事は締めにしようと思っていたので、それで気合が入ったんですよ。キチッとした枠のなかでどれだけ書けるかやってみたいというのがあった。

細見　じゃあ丁度よかったですね、これで受賞もされて、けりをつけるみたいな。ここからは無重力というか、浮遊できるような感じで。

九里　はい。

細見　小野十三郎は短歌俳句の韻律を奴隷の韻律と悪罵しましたが、実際は私たちの感じでは、短歌俳句の人のほうが小野さんの批評から豊かなものを引き出していった、という感じがしているんですね。詩のほうはむしろ安心しちゃって、詩はいいんだ、みたいなね、そんなところもありました。小野十三郎の名を冠した賞ですからね、また関心を持ってもらとも思います。

九里　小野の詩は好きですよ。『風景』のなかの「葦の地方」がいいな、と思ったんです。小野は『垂直旅行』という詩集も出していますけど、本当に時間を縦に抉っているな、と、現代の奥に昔が見えるみたいな感じで、いいなと思っていたんです。それもあって、小野十三郎の名前に惹かれたこともあって、応募してみようと思いましたね。

細見　ありがとうございます。これからも、俳句、エッセイ、それから六〇年安保を巡る学生論、知識人論――それは木下夕爾とも繋がっていくわけですね。

九里　そうですね。

細見　そのあたりも期待しておりますので、是非よろしくお願いします。

九里　ありがとうございます。

（二〇二一年十一月二十二日、オンラインにて開催）